The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国際協力のお祭り One World Festival
Author(s)	木村, 暁
Citation	目で見るWHO. 2020, 72, p. 10-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国際協力のお祭り One World Festival

日本WHO協会理事
人間科学博士
木村　暁

カザルスが国連本部でチェロの演奏を披露したのは
94歳でした。WHOは「芸術と健康」を刊行しました。
エレクトーンは両手両足を使い、頭の訓練にもってこいです。

第 27 回の One World Festival が大阪は扇町公園、北区民センター、カンテレスクエアを会場として２月１～２日に開催されました。日本 WHO 協会も昨年に引き続いて２回目の参加です。当協会の出し物は、ブース出展、医療通訳のセミナー、WHO インターンシップ経験者の発表会の三つでした。親子連れ、高校・大学生から高齢者まで、男女を問わず参加がありましたが、特に若い女性が目立ちました。

会場の隣の筋は食道楽で有名な天神橋筋です。そのアーケードに Festival の広告が吊り下げられていました。(写真左)

ブース会場は区民センターの２階です。階段を上がる途中の踊り場で外務省の写真展がありました。座っているグリーンのジャケットを着たボランティアさんはまだ高校生のお嬢さん。(写真上)

扇町公園に設置された国連難民キャンプの内部。私たちの日常では、キャンプ生活は楽しい非日常を思わせますが、難民キャンプで長期間過ごさなければならない境遇は想像することさえ難しいことです。キャンプ生活では食べることが大きな楽しみでもあり、癒しでもあります。(写真右)

枯れた大地に緑がよみがえることこそ、子供たちに未来を与える源泉ですね。故中村哲医師の遺志がいろいろなところで共有されています。(写真左)

外国人にとって安全で安心な大阪の医療を目指して
いのちを守る医療通訳士・国際看護師の役割

（当協会とりんくう医療通訳翻訳協議会IMEDIATAとの共催）

パネリストとして阪大病院国際医療センターの中田研氏、IMEDIATA理事本田友香氏、東和エンジニアリングの中牟田和彦氏、済生会中津病院の許由香氏が登壇し、それぞれの立場、経験から発表を行いました。日本の医療通訳が抱えている課題は、報酬（給与）が少ない、国家資格でない、仕事が少ないなど多くあります。

一方で、経験のある医療通訳士の支援を受けた医師は、「もう医療通訳士なしの医療には戻れない」という感想も持っています。

言葉の壁の次に待ち構えているのが文化、習慣、制度の違いなどです。日本の医療は質が高くきめ細やかさを備えています。

克服するべき課題は多く、道のりは長いですが一歩ずつの継続的前進が不可欠です。

開始前の参加者です。この後にも入場者が続き多くの人々が関心を持っていると感じました。

目指せWHO　WHOインターンシップ報告会

カンテレ1Fステージで「目指せWHO」をテーマに昨年に引き続いて座談会形式で経験談を披露しました。登壇者はフィリピン西太平洋地域事務所の佐々さん、インド南東アジア地域事務所の稲垣さん、スイスWHO本部の吉川さん、元WHO職員の大谷さん、とそれぞれ別の場所での経験でした。印象深かったのは、WHO本部の業務が医療というより最早政治・外交であるのに対して、地域事務所では各国・地域ごとの医療の向上を行なっていたということです。勿論どちらも国際保健がうまく機能するためには必要な業務ですが、自分が何をしたいかによってインターン先も慎重に考える必要があります。

WHOインターンを目指す若い人たちからの質問も受け付け、世界を目指すきっかけとなれば幸いです。日本WHO協会はWHOインターンを目指す方々に支援を行っています。
詳しくはホームページをご覧ください。

座談会終了後の記念撮影
右から中村理事長、大谷さん、佐々さん、稲垣さん、安田理事、吉川さん、前理事長の關さん、（手前）南谷さん、渡部事務局長

日本WHO協会ブース出展

WHO協会の出店ブースです。開店の準備がようやく整ったところです。WHOの出版物やコロナウイルスの情報を展示しました。コロナウイルスに関する質問が殺到するのでは、と予想しましたがそれほどでもありませんでした。

協会の売り物は公衆衛生の情報ですので、アピールには工夫が必要だと感じました。他のブースでやっていた、クイズなどは観客の足を止めさせるのに有効だと思いました。

まだ小学生か中学生なり立てだと思いますが、お店番というより楽しくて仕方ないと言う感じで、すでに店主の風格です。所狭しと並べられたアフリカの物品は色鮮やかで思わず手に取ってしまいます。(写真右)

ブース出展会場の入り口が、大勢の親子連れで参加し混雑するほどでした。小さい時から国際協力に目覚める子供が増えると未来が明るく感じます。子供たちの背中を後押しするご両親もまた素晴らしく思います。(写真下)

JICAの進路相談会です。若い人たちが熱心に未来の相談をしていました。吹きさらしの通路でしたが、相談者の国際協力への熱意を感じました。(写真上)

高校生のクラブ活動なのでしょう。私たちが若かったころ、国際協力もNPOも言葉としても概念としても知りませんでした。時代は確実に変わっています。
(写真下)

揃って見学に来ていた高校生たち。毎年高校生など若い人たちが見学に来ています。未来は若者のもの。(写真上)

高齢者も負けてはいられません。様々なコースがあるうち、国際文化交流科は毎年本フェスティバルに出展しているそうです。大阪のNPOらしく親しみのある、手作り感あふれるデザインです。
大阪良いとこ一度はおいで。
(写真左)

内閣府のブースは昨年と同じく当協会の左斜め前でした。PKOについて賛否両論がありますが、私たちの税金で行われ、派遣隊員が命を懸けているのですから、しっかりと考える課題と思いました 。
(写真下)

当協会の副理事長である更家氏がウガンダ共和国の名誉領事に就任しました。サラヤ株式会社の出展ブースで、ウガンダ産のコーヒーが無料提供され、ほっと一息入れる場所となりました。(写真上)